

## 近代建築思潮の伝播に関する研究

ーアドルフ・ロース「装飾と犯罪」の西洋と日本の受容過程を通してー

### ▶序論

#### ・目次構成

- 序論
- 0-1 研究背景
- 0-2 研究目的
- 0-3 研究方法
- 0-4 既往研究
  - 0-4-1 「装飾と犯罪」に関する研究
  - 0-4-2 国内におけるロース受容過程に関する研究
  - 0-4-3 海外におけるロース受容過程に関する研究
  - 0-4-4 ロースとメディアに関する研究

#### 0-5 本研究の位置づけ

#### 第1章 アドルフ・ロースと「装飾と犯罪」

- 1-1 世紀末ウィーンとアドルフ・ロース
  - 1-1-0 はじめに
  - 1-1-1 ロースの活動期について
  - 1-1-2 ウィーンの諸外国に対する状況
  - 1-1-3 ウィーンでロースと関係のあった人々・団体
  - 1-1-4 ウィーンの出版事情
  - 1-1-5 小結

#### 1-2 「装飾と犯罪」の波及とその影響

- 1-2-0 はじめに
- 1-2-1 「装飾と犯罪」編集経緯
- 1-2-2 「装飾と犯罪」出版経緯
- 1-2-3 「装飾と犯罪」各国翻訳経緯
- 1-2-4 小結

#### 第2章 「装飾と犯罪」出版後の西洋におけるロース受容

- 2-0 はじめに
- 2-1 ウィーン、ドイツ
  - 2-1-1 「装飾と犯罪」発表直後におけるウィーン・ドイツのロース受容
  - 2-1-2 1920年前後におけるウィーン・ドイツのロース受容
  - 2-1-3 1930年前後におけるウィーン・ドイツのロース受容
  - 2-1-4 特に影響の大きかった媒体
- 2-2 フランス
  - 2-2-1 「装飾と犯罪」発表直後におけるフランスのロース受容
  - 2-2-2 1920年前後におけるフランスのロース受容
  - 2-2-3 1930年前後におけるウィーン・ドイツのロース受容
  - 2-2-4 特に影響の大きかった媒体
- 2-3 イタリア
  - 2-3-1 「装飾と犯罪」発表直後におけるイタリアのロース受容
  - 2-3-2 1920年前後におけるイタリアのロース受容
  - 2-3-3 1930年前後におけるイタリアのロース受容
  - 2-3-4 特に影響の大きかった媒体
- 2-4 イギリス、アメリカ
  - 2-4-1 「装飾と犯罪」発表直後におけるイギリス・アメリカのロース受容
  - 2-4-2 1920年前後におけるイギリス・アメリカのロース受容
  - 2-4-3 1930年前後におけるイギリス・アメリカのロース受容
  - 2-4-4 特に影響の大きかった媒体
- 2-5 小結

#### 第3章 国内におけるロース受容

- 3-0 国内ロース研究の系譜
- 3-1 戦後の国内におけるロース研究の展開
  - 3-1-1 「装飾と犯罪」の初邦訳
  - 3-1-2 国内ロース研究の活性化
  - 3-1-3 ロース論考研究の定礎
- 3-2 戦前のロース研究
  - 3-2-1 ロースを国内で紹介した人物およびその媒体
  - 3-2-2 ロースに関する情報の所在
- 3-3 小結

#### 第4章 ロースの受容過程【国内と海外比較】

- 1-1 はじめに
- 1-2 国内・海外におけるロース評価の相違
  - 1-1 戦前ロース研究の評価と系譜
  - 1-2 ロースと建築ジャーナリズム
  - 1-3 モダニズム期におけるロースの立ち位置
  - 1-4 小結

#### 第5章 結論

- 参考資料
- 参考文献／図版出典

### ▶結論

## 0-1. 研究背景 / 目的

モダニズム建築の世界において、アドルフ・ロース (Adolf Loos, 1870-1933) が如何に受容され、また如何に解釈されてきたのかを明らかにする。20世紀初頭に誕生した近代建築の胚芽が、いかにして全世界に広がり、現在に至る歴史の層を形成してきたのか、その一断面をウィーンの建築家アドルフ・ロースの論考「装飾と犯罪」のモダニズム期における西洋及び国内での受容過程に焦点をあて、分析することによって、近代建築の展開を捉え直すことを本研究の主目的とする。戦前の日本国内におけるロースの受容過程の系譜についてはいくつかの研究があるが\*<sup>1</sup>、こと西洋におけるロースの受容過程を体系的に取り扱った研究はほぼないと言える。これは日本国内のみに言えることではなく、戦後において多面的な研究が進むロース研究の状況に反して、その国におけるロースの受容過程とその影響を分析した研究は極めて少ない\*<sup>2</sup>。このような状況の中、戦前の比較的早い段階からロースの紹介が行われたわが国および西洋における受容過程を分析のうえ、両者を比較することは、これまでのロース研究と近代建築の展開に新たな一石を投じることができると期待する。

## 0-2. 研究方法

i . 「装飾と犯罪」が執筆された経緯、およびその時代背景、関連人物などを整理する。

ii . 【西洋におけるロース論考受容過程】「装飾と犯罪」出版後のヨーロッパ (ウィーン、ドイツ、イギリス、フランス、イタリア) 及びアメリカにおけるロース評価を整理し、受容過程を分析する。具体的には、当時刊行されていた新聞や雑誌記事および関連書籍をその分析対象とし、各国の受容過程の隔たりを明らかにする。

iii . 【国内におけるロース論考受容過程】これまでに行われた戦前のロース受容過程\*<sup>1</sup>に関連する研究を整理する。

iv . 【国内外比較】ii . およびiii . の分析をもとに、海西洋と日本国内におけるロース研究の系譜・および相違を明らかにする。これら研究の体系化および分類により、ロース研究の全体像に迫る。

## 0-3. 既往研究

【アドルフ・ロースに関する国内主要研究】

- ・長尾重武「ADOLF LOOS 研究：1.ADOLF LOOSの空間イメージ」1971
- ・伊藤哲夫『装飾と犯罪-建築文化論集-』1989
- ・川向正人『アドルフ・ロース』1987
- ・河田智成「アドルフ・ロースの建築と言葉 1~4」1995-1996

【アドルフ・ロースに関する海外主要研究】

- ・H. Kulka『Adolf Loos : das Werk des Architekten』1931
- ・Burkhardt Rukschcio, Roland L Schachel『Adolf Loos, Leben und Werk』1982
- ・Adolf Loos, Adolf Opel『Ornament and crime : selected essays』1998

【建築思潮の移入に関する研究】

- ・藤岡洋保「大正末期から昭和戦前の日本の建築界におけるル・コルビュジェに評価」1987
- ・河東義之「明治末期から大正初期に於けるゼツェシオンの導入について」1974
- ・原功一「日本における西洋モダニズム建築の受容過程ー「アドルフ・ロース」をとりまく一断面ー」2012

## 1. アドルフ・ロースと「装飾と犯罪」

### 1-1 ベルリンでの講演と失望

1909年11月11日、ロースはベルリンにある美術商のポール・カシラー (Paul Cassirer, 1871-1926) のギャラリーにて「Kritik der angewandten Kunst (応用芸術に対する批評)」と題された講演を行った。この講演の原稿こそが後に世界中に知られることになる「Ornament and Crime (装飾と犯罪)」のオリジナルである。講演を取り仕切るオーガナイザーはロースの友人で美術商のヘルヴァルト・ヴァルデン (Herwarth Walden, 1879-1941) で、講演の公式スポンサーもヴァルデンが設立した団体である「Verein für Kunst (Association for Art)」であった。ロースにヴァルデンを引きあわせたのは、ロースと懇意あった作家のカール・クラウス (Karl Kraus, 1874-1936) であり、ロースとヴァルデンに講演のタイトルを提案したのもクラウスであった。しかし、当時のウィーンにおける芸術思潮を十分に理解していなかった聴衆の反応は薄く、\*<sup>3</sup>これに失望したロースはウィーンへ帰国し、タイトルを「Ornament und Verbrechen」と改めた草稿を書き始めた。



fig.1: ロース (左)、クラウス (中)、ヴァルデン (右)



fig.2: ベルリン講演のポスター

### 1-2 講演「Ornament und Verbrechen」に対する反応

ベルリンでの講演から約2ヶ月後の1910年2月21日、ロースはウィーンにて「Ornament und Verbrechen」の初稿をもとに講演を行い、同地において大きな反響を得た。また、ロースは同年3月3日にベルリンで、12月17日にミュンヘンで、そして1911年3月17日にプラハにおいて再講演を行っている。これらの講演は各地におけるロース認知を広めた要因となったが、その中でも特に注目すべきは、初講演の手助けをしたヘルヴァルト・ヴァルデンが創刊した雑誌『Der Sturm (嵐)』\*<sup>4</sup>に掲載された講演の告知やロースの論考であろう。同誌はフランスでの読者層を獲得していたことから、フランスでの初期ロース受容を担ったと考えられる。\*<sup>5</sup>

### 1-3 フランス語による初出版とその影響

1913年6月、フランスの雑誌『Les Cahiers d'Aujourd'hui No.5』\*<sup>6</sup>に「Ornament et Crime」が掲載され、初出版された。この初版は美術史家のマルセル・レイ (Marcel Ray, 生没年不明) によってフランス語に翻訳され、同書はフランスにおけるロース受容の礎となった。また上記の掲載以前、1912年発行の同誌第2号にもロース論考「建築について (Architektur)」が掲載されており、同序文においてロースは「最も議論され、最も孤高で、近代のウィーンで真似されている」\*<sup>7</sup>人物であると紹介されている。また、同誌への掲載が端緒となり、1920年にフランスの大美術展覧会であるサロン・ドーロンヌ展 (Salon d'automne) \*<sup>8</sup>への出展を果たすこととなるなど、フランスでのロース評価を高めた。

## 2. 「装飾と犯罪」出版後の西洋におけるロース受容

ここでは、「装飾と犯罪」が1913年にフランス語で出版されて以降、同書とその思想が、西洋世界にいか伝播していったのか、各国のプロセスを追っていく。

### 2-1 ウィーン・ドイツ

1929年10月24日、ロースの弟子であり良き理解者であったハインリッヒ・クルカ (Heinrich Kulka, 1900-1971) と、ロースと親しかった編集者のフランツ・グリュック (Franz Glück, 1899-1981) はドイツ紙「Frankfurter Zeitung」紙上に「Ornament und Verbrechen」を掲載した (fig.3)。さらに2週間後の1929年11月10日、ドイツ紙「Prager Tagblatt」紙上において再掲載された。その際にはクルカが短い序文を寄せ、ロースが「Ornament und Verbrechen」に「Ornament und Verbrechen」が掲載される。を執筆した経緯を紹介している。ドイツ語として初めて一般に公開されたのはロースが同論考を執筆してから20年が経過した時点であったが、その理由としては①ロースがパリに移住していたこと (1924-28年) ②当時のウィーン・ドイツにおける芸術思潮が、同論考の掲載を容認しない状況であった\*<sup>9</sup>ことが挙げられる。



fig.3: 「Frankfurter Zeitung」(1929.10.24) 左下に「Ornament und Verbrechen」が掲載される。

### 2-2 フランス

1913年に出版された「Ornament et Crime」はフランスを中心とした地域で活躍していた建築家・美術家たちに大きな影響を与えた。当時はまだ無名の画家であったル・コルビュジェ (Le Corbusier, 1887-1965) もその一人であり、オーギュスト・ペレ (Auguste Perret, 1874-1954) に紹介された\*<sup>10</sup>同記事に刺激を受けたコルビュジェは自身が編集を行う雑誌『L'Esprit Nouveau』の第2号に同論文を再掲載した。また、表紙この再掲にあたってコルビュジェはロースを紹介する文書を寄せており\*<sup>11</sup>、これによると、コルビュジェはロースとその論考を大々的かつ好意的に受け入れ、ロースも再掲を「要請していた」ことが伺える。また1926年春、フランスの建築誌『L'architecture Vivante』の第4号に同論文が再掲された。以上の再掲はフランス国内におけるロースの認知度を大幅に向上させ、後にロースがパリへ赴ききっかけとなった。



fig.4: 『L'Esprit Nouveau No.2』表紙

### 2-3 イタリア

イタリアにおけるロースの影響を分析するためには、同時代におけるイタリア未来派の影響を考慮する必要がある。イタリア未来派\*<sup>12</sup>とその創設者であるマリネッティは、同時代におけるパリとの通信手段をもっていた。それこそが、ベルリンにイタリア未来派を紹介し、ロースやカール・クラウスとも親交があったヘルヴェルト・ヴァルデンが創刊した『嵐 (Der Sturm)』であった。(fig.5)

ヴァルデンはマリネッティを範とし、自身が前衛主義者（avant-gardiste）であることを自覚していた。ヴァルデンは自身が経営する画廊と、自身が立ち上げた雑誌がベルリン内外の芸術家たちの思想交流の場となることを目指していた。よって、イタリア未来派と交流があった『嵐（Der Sturm）』にロースの論考が掲載されたことは、イタリアを中心として国際的に活躍する芸術家層への大きなアピールとなったと考えられる。また、ロースは1924年、滞在先のパリからジュゼッペ・デ・フィネッティ（Giuseppe de Finetti, 1892-1952）<sup>\*13</sup>に手紙を書いており<sup>\*14</sup>、その文中にて著作『建築（Über Architektur）』をイタリア語に翻訳するよう要請していたが、フィネッティはこの約束を反故にしている。<sup>\*</sup><sup>15</sup>なお、イタリアにおいて「装飾と犯罪」が初めて紹介されたのは1934年1月17日発行の『Casabella』(fig.6)誌上である。またフィ



fig.5:『Der Sturm』(1912Oct)表紙。「Inhalt (目次)」の中に「F.T.Marineti: Die futuristische Literatur (未来派宣言)」と書かれている。

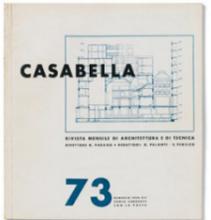


fig.6:『Casabella』(1934.1.17)表紙。

ネッティは、1934年7月発行の新聞『L'Ambrosiano』（ミラノ、1922-1944）にて、ハインリッヒ・クルカ著『Adolf Loos: Das Werk des Architekten』（1931）をイタリア国内で初めて紹介した。いずれにしても、イタリアにおける「Ornament und Verbrechen」の受容は1930年代に入ってからであり、その伝播のもととなったのはドイツ語の文献資料であった。

#### 2-4 イギリス・アメリカ

イギリスやアメリカにおけるロース受容は、イギリスの美術雑誌『ザ・ストウディオ（The Studio）』<sup>\*16</sup>の1906年特集号『オーストリアにおける芸術の復活（The Art Revival in Austria）』内にて確認されるものが最初期のものと思われる。同記事においてロースは、ウィーン分離派やその他の装飾作家が活躍するウィーンの芸術思潮の中であって、イギリス製の家具や様式を重んじる作家として紹介されている。「装飾と犯罪」が執筆される以前のロース紹介であり、同誌の国際性を考慮すると、英語圏におけるロース受容を既に担っていた可能性も挙げられよう。しかし、これ以降に英語圏におけるロース紹介は現在確認できる限りにおいて1930年前後に発表された資料であり、1933年にロースが亡くなったことによって開催された回顧展のカタログである『Exhibition of the workof Adolf Loos (Architectural Review Katalog)』（Ludwig Münz, 1934）のほか、『Modern Architecture: romanticism anda reintgration』（H-R Hitchcock, 1929）や『Pioneer of Modern Movement』（N. Pevsner, 1936）といった「モダニズム建築の一翼を担った建築家のうちの一人」といった文脈でロースを語る書籍の登場まで待つことになる。以上の経緯から、約15年に渡る受容の空白期間の存在により、「**装飾と犯罪**」が英語圏に与えた直接の影響を探ることは困難である。

#### 2-5 小結：西洋各国の受容状況とその経路

「装飾と犯罪」がフランス語で初出版され、その後約20年の時を経てドイツ語版として再掲載されたのは、①当時のドイツ語圏における芸術思潮が同書を受け入れなかったこと②ロースのパリへの接近が要因である。また、イタリアやイギリス・アメリカの受容過程においては、ドイツ語文献の影響が伺えた。

### 3. 国内におけるロース受容

ここでは、日本国内におけるロース研究の系譜について整理していく。国内におけるロース受容に関しては、1920年代からの戦前期にはじまり、その後約30年の空白期間を経たのち、1960年代後期から再び研究の機運が高まってきた背景がある。なお、本章においては国内におけるロース受容の先行研究として、「西洋モダニズム運動の受容過程に関する研究 2－戦前日本におけるアドルフ・ロースの紹介」(原功一, 建築歴史・意匠, 2013年度日本建築学会大会（北海道）学術講演会・建築デザイン発表会梗概）を随時参照する。

#### 3-1 戦後の国内におけるロース研究の展開

①戦後のロース研究は1967年、中村哲夫氏によって「Ornament and Crime」が初邦訳されたことをその端緒とするものである。雑誌『SD』（特集ウィーンー伝統とその相克, 1967年7月号）に掲載されたその論考は「装飾と罪悪」と題され、戦後国内ロース研究の幕開けを告げた。

②その後のロース研究の活性化の主たる成果として、1971年に長尾重武氏によって発表された「ADOLF LOOS研究(1.ADOLF LOOSの空間イメージ)」がある。

③日本の戦後ロース受容において、伊藤哲夫氏によるロース論考の訳書『装飾と罪悪　建築・文化論集』（1989）の果たした役割は大きい。それまで断片的にしか翻訳がされていなかったロース論考のうち、26編の翻訳を掲載し、国内におけるロース研究の幅を押し広げた。

#### 3-2 戦前の国内におけるロース研究の展開とその情報の所在

戦前の国内ロース受容を担った文献と、その情報の所在（研究の底本となった文献）は以下の通りである。(fig.7)

1923	L'Architecture vivante	パリ	1924	森口多里	一社会主義的建築家の思想と作品	建築新潮
1926	Der modern Zweckbau (A.Behne)	ベ ーリン	1927	岸田日出刀	歐米建築界の趨勢	建築年鑑
			1930	川喜田 仲田	現代の目的建築 (3)	建築新潮
			上野伊三郎	ドイツ及オースリに於けるイターナショナル建築	イターナショナル建築	
			1931	蔵田周忠	フーゴ・ヘーリンク	国際建築
				川喜田煉七郎	新興建築史 No.1	アイソーラ
			1932	川喜田煉七郎	近代建築史 No.1	アイソーラ
			1935	蔵田周忠	『現代建築』	—
1930	Die Baukunst der neuesten Zeit (A.Platz)	ベ ーリン	1931	蔵田周忠	アドルフ・ロース	国際建築
			1932	川喜田煉七郎	近代建築史 No.1	アイソーラ
			1933	蔵田周忠	ブルノオ・タウト	国際建築
			1934	川喜田煉七郎	近代建築史 No.4	アイソーラ
				蔵田周忠	『現代建築』	—
			1935	川喜田煉七郎	チェッコスローヴァキヤ共和国	アイソーラ
1931	Das neue Frankfurt	フランクフルト	1931	(山越邦彦)	アドルフ・ルース	建築時潮
				蔵田周忠	アドルフ・ロース	国際建築
			1932	坂垣鷹穂	『藝術界の基調と時潮』	—
1931	WasmuthsMonatshefte für Baukunst	ベ ーリン	1931	眞柄藤三	アドルフ、ルース	イターナショナル建築
				蔵田周忠	アドルフ・ロース	国際建築
1929	Modern Architecture (H.R.Hitchcock)	ニューヨーク	1933	川喜田煉七郎	新興建築史抄No.4	イターナショナル建築
				川喜田煉七郎	新興建築史抄No.5	国際建築
1931	Adolf Loos: Das Werk des Architekten (H.Kulka)	ヴイーン		(山越邦彦)	アドルフ・ルース	建築時潮
				(蔵田周忠)	アドルフ・ロース	国際建築
			1931	眞柄藤三	アドルフ、ルース	イターナショナル建築
				蔵田周忠	アドルフ・ロース	国際建築
				蔵田周忠	『現代建築』	—

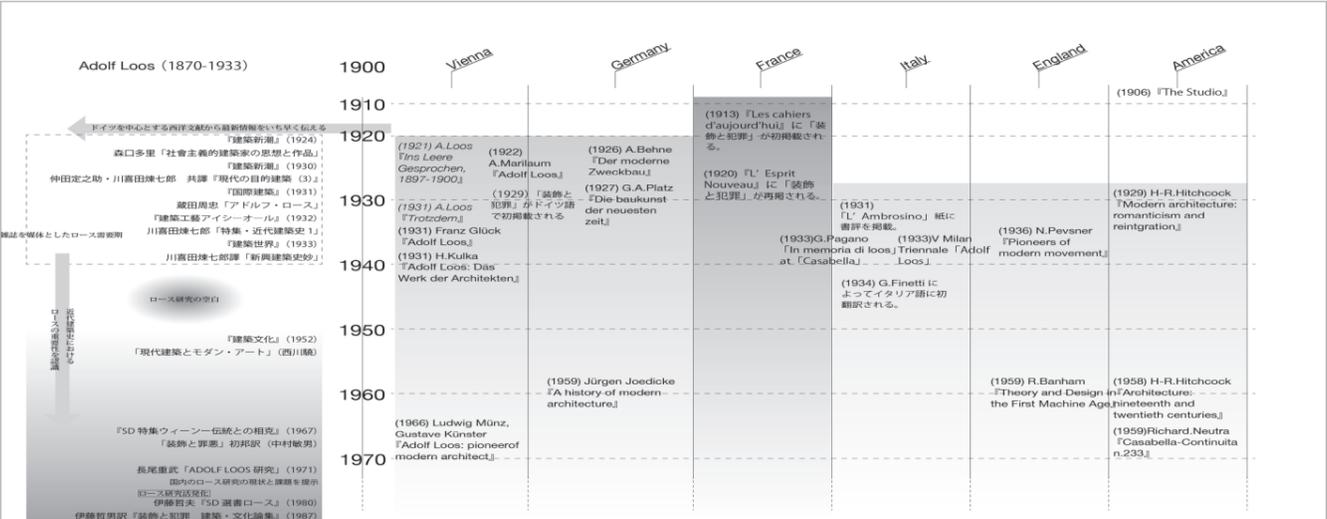
fig.7:戦前の主なロース記事と、その情報の所在

以上より、戦前の日本におけるロース受容に大きく関わった文献として、以下の二点の書籍が挙げられる。

・『Der moderne Zweckbau』（Adolf Behne, Berlin, 1926）

・『Die Baukunst der neuesten Zeit』（Adolf Platz, Berlin, 1930）

これらの書籍はともに、1920年代までの西洋建築界の動向を体系的に記したものである。そこで語られるロース像は”モダニズムの



tab.1: 国内および海外におけるロース研究の系譜

旗手”としてのロースであり、そのことは1）コルビュジェに先立つ先駆的存在として、2）ヴァグナー派と関連づけてロースが語られていることから伺える。また、上記の二冊以外に戦前のロース受容に影響を与えた文献としてはハインリヒ・クルカの編集によって1931年にウィーンにて出版された『Adolf Loos : Das Werk des Architekten』のみであることから、日本における戦前ロース受容はその大部分をドイツ・ウィーンのドイツ語圏を経由し、西洋における近代建築史（モダニズム）の文脈の中で編集された文献によって移入された情報に依っているとと言える。

#### 3-3 戦前日本のロース受容と日本の近代建築思潮

戦前日本のロース受容に関して大きな役割を果たした蔵田周忠と川喜田煉七郎は、当時の国内におけるアカデミズムに反する姿勢が共通していた。1920年代には分離派に接近し、そののちにはバウハウスの理念に共感し、その普及に務める過程においてロースを受容し、自身の建築や思想を世界的潮流に結びつけようとしていた。<sup>\*</sup><sup>17</sup>

## 4. 西洋と国内におけるロース受容過程の相違

ここまで整理した西洋・日本国内におけるロースの受容過程について、それぞれの相違を明らかにし、世界的なロース受容の流れについて考察する。

#### 4-1 ロース受容を担った媒体の相違

「装飾と犯罪」が発表された戦前の西洋においてロースの建築思想の普及に貢献したのは、当時発刊されていた新聞や雑誌などによるものが多く見られる反面、日本のロース受容を担った情報媒体のほとんどは、西洋世界の中で形成された建築思想の枠の中で出版された海外文献であった。

#### 4-2 日本と西洋における情報経路の相違

3章より、日本国内の受容過程はその大部分をドイツ語圏の文献依っていることが分かった。しかし2章より、西洋におけるロース受容過程はフランスを経由し、その後にドイツ語圏やそれ以外の地域や国へと伝播する経路が浮かび上がった。

#### 4-3 「近代建築」の文脈上におけるロースの援用

2, 3章より、1930年代に入ると、ロースを近代建築思潮の中心人物として”援用”する例が散見された。これは西洋においても、国内においても同様の動きが伺えた。

### 結論

アドルフ・ロースの「装飾と犯罪」を切り口に、西洋におけるロース受容と近代建築思潮の伝播について明らかとした。また、日本国内のロース受容過程と照らし合わせ、伝播の経路の相違について比較考察することにより、世界的な近代建築思潮の伝播の過程における一断面を明らかとすることができた。

## 註釈

<sup>[</sup>\*1日本における西洋モダニズムの受容過程（原功一、2012）に詳しい。
<sup>[</sup>\*2近年になって『Privacy and publicity : modern architecture as mass media』（Beatriz Colomina, MIT Press, 1994）「Loos and Italy」（『Adolf Loos: Our Contemporary』, Benedetto Gravagnuolo, 2012）など、ロースの受容過程に焦点をあてた研究が出現しているが、その絶対数は少なく、また複数の国における受容過程を分析の対象とした研究はほぼ無いと言える。
<sup>[</sup>\*3『Adolf Loos: Our Contemporary』（MAK, 2012）P47より。また同書においてChristopherLongは、このベルリンでの講演の聴衆のほとんどはクラウスやヴァルデンの友人で、その数も20名前後であった可能性を指摘している。
<sup>[</sup>\*4『嵐（Der Sturm）』は、ベルリンにおけるドイツ表現主義運動を代表する有力者であったヘルヴェルト・ヴァルデン（Herwarth Walden, 1879-1941）によって創刊された雑誌。後にトリスタン・ツツァによるフランス語を掲載するなど、フランスにおける読者層も意識していた。ロースは同誌に計6編の論考を寄稿した（『Vom armen reichen Mann』, 「Tristan in Wien」, 「Damenmode」, 「Über Architektur」, 『Vom Gehen, stehen, liegen, schlafen, essen, trinken』, 「Der Sattlermeister」）。
<sup>[</sup>\*5レイナー・パンナムは「第一機械時代の理論とデザイン」の中で『雑誌「デア・シュトゥルム」への接近は、一部の人々とはいえ、国際的な広がりをもった層への接近であり、ほぼ直後にパリで再録が出る形で、その成果があらわれた。』（P123）と指摘している。
<sup>[</sup>\*6『Les Cahiers d'Aujourd'hui』はフランスの雑誌。発行者は美術批評家であるジョルジュ・ベッソン（George Besson, 1882-1971）である。同誌はのちにロースの著作集となる『Ins Leere Gesprochen』を発行したジョルジュ・クレ社によって1912年に創刊された。
<sup>[</sup>\*7『Les Cahiers d'Aujourd'hui No.2』（1912）より。また、翻訳者のマルセル・レイは1930年に出版された『（Adolf Loos Festschrift zum 60.Geburtsstag）アドルフ・ロース生誕60周年記念文集』にて1913年時点におけるロースを賞讃しつつも、当時のヨーロッパにおいてはロースの名前を知る者は限られていたことを指摘している。
<sup>[</sup>\*8パリ最大の百貨店であるサマリテヌ百貨店が主催したフランスの美術展覧会。1903年10月に第一回開催。モデリアーニやセザンヌ、ピカソといった画家たちの活躍の舞台となった。
<sup>[</sup>\*91921年、ロースによる初の著作集『虚空へ向けて（Ins Leere Gesprochen）』が発刊される際、ロースはドイツの出版社クルト・ヴォルフ社（フランク・カフカ等の作品を扱っていた）からの出版を予定していたが、同社から「ヨゼフ・ホフマンを攻撃している箇所を変更し、削除する」よう要請されたため、フランスのジョルジュ・クレ社より同書を発表した経緯がある。（『『虚空へ向けて』加藤淳訳, アセター zum 60.Geburtsstag）』
<sup>[</sup>\*10『Adolf Loos: Our Contemporary』（MAK, 2012）P48より。
<sup>[</sup>\*11「『我々は今、『L'Architecture et le style moderne』の次に「Ornament et Crime」を掲載する。これらの論考は『Les Cahiers d'Aujourd'hui』（1913）によってフランスで発表されているが、ロース氏の要請によって再掲する。我々はロース氏の未公開の論考を発表したいと考えている。』（同誌より、筆者訳）
上記のように、コルビュジェはロースの「建築について（Architektur）」も掲載したいと考えていたようだが、それについては果たされなかった。
<sup>[</sup>\*12イタリア未来派（Futurismo）は、1909年に批評家であるフィリッポ・トンマーゾ・マリネッティ（Filippo Tommaso Marinetti, 1876-1944）によって発表された『未来主義創立宣言』が発端となり結成されたイタリアの前衛芸術運動。過去における芸術を刷新し、機械工業の力によって新たな近代社会を形成することを目指した。
<sup>[</sup>\*13ジュゼッペ・デ・フィネッティ（Giuseppe de Finetti, 1892-1952）はイタリアの建築家、都市計画家。20世紀前半に結成された芸術集団であるノヴェチェト（Novocento）のメンバーであった。1912年前後の期間をベルリンやウィーンで過ごし、アドルフ・ロースとも親交があった。代表作に『日時計に家』（ミラノ、1925）など。
<sup>[</sup>\*14この手紙は現在バルマ大学内のプライベート・コレクション（'Pratica Loos', C.S.A.C）に保存されているが、未出版の資料である。（『Adolf Loos: Our Contemporary』（MAK, 2012）P28より。
<sup>[</sup>\*151931年にジオ・ボンティはフィネッティに対し、ドムスに「ロースに関する批評（'serious article' about Adolf Loos）」寄稿するよう要請する手紙を書いているが、フィネッティはこの要請を断っている。
<sup>[</sup>\*16イギリスの美術史家チャールズ・ホルム（Charles Holme, 1848-1923）によって1893年に創刊された美術雑誌。アーサー・ヌーヴォーやアーツ・アンド・クラフツ運動に大きな影響を与えた。また、フランス版やアメリカ版を同時発行するなど、国際的な雑誌として知られた。
<sup>[</sup>\*17『日本における西洋モダニズムの受容過程。過去における芸術を刷新し、機械工業の力によって新たな近代社会を形成することを目指した。
<sup>[</sup>\*18ジュゼッペ・デ・フィネッティ（Giuseppe de Finetti, 1892-1952）はイタリアの建築家、都市計画家。20世紀前半に結成された芸術集団であるノヴェチェト（Novocento）のメンバーであった。1912年前後の期間をベルリンやウィーンで過ごし、アドルフ・ロースとも親交があった。代表作に『日時計に家』（ミラノ、1925）など。
<sup>[</sup>\*19この手紙は現在バルマ大学内のプライベート・コレクション（'Pratica Loos', C.S.A.C）に保存されているが、未出版の資料である。（『Adolf Loos: Our Contemporary』（MAK, 2012）P28より。
<sup>[</sup>\*201931年にジオ・ボンティはフィネッティに対し、ドムスに「ロースに関する批評（'serious article' about Adolf Loos）」寄稿するよう要請する手紙を書いているが、フィネッティはこの要請を断っている。
<sup>[</sup>\*21『日本における西洋モダニズムの受容過程。過去における芸術を刷新し、機械工業の力によって新たな近代社会を形成することを目指した。
<sup>[</sup>\*22ジュゼッペ・デ・フィネッティ（Giuseppe de Finetti, 1892-1952）はイタリアの建築家、都市計画家。20世紀前半に結成された芸術集団であるノヴェチェト（Novocento）のメンバーであった。1912年前後の期間をベルリンやウィーンで過ごし、アドルフ・ロースとも親交があった。代表作に『日時計に家』（ミラノ、1925）など。
<sup>[</sup>\*23この手紙は現在バルマ大学内のプライベート・コレクション（'Pratica Loos', C.S.A.C）に保存されているが、未出版の資料である。（『Adolf Loos: Our Contemporary』（MAK, 2012）P28より。
<sup>[</sup>\*241931年にジオ・ボンティはフィネッティに対し、ドムスに「ロースに関する批評（'serious article' about Adolf Loos）」寄稿するよう要請する手紙を書いているが、フィネッティはこの要請を断っている。
<sup>[</sup>\*25イギリスの美術史家チャールズ・ホルム（Charles Holme, 1848-1923）によって1893年に創刊された美術雑誌。アーサー・ヌーヴォーやアーツ・アンド・クラフツ運動に大きな影響を与えた。また、フランス版やアメリカ版を同時発行するなど、国際的な雑誌として知られた。
<sup>[</sup>\*26『日本における西洋モダニズムの受容過程。過去における芸術を刷新し、機械工業の力によって新たな近代社会を形成することを目指した。
<sup>[</sup>\*27ジュゼッペ・デ・フィネッティ（Giuseppe de Finetti, 1892-1952）はイタリアの建築家、都市計画家。20世紀前半に結成された芸術集団であるノヴェチェト（Novocento）のメンバーであった。1912年前後の期間をベルリンやウィーンで過ごし、アドルフ・ロースとも親交があった。代表作に『日時計に家』（ミラノ、1925）など。
<sup>[</sup>\*28この手紙は現在バルマ大学内のプライベート・コレクション（'Pratica Loos', C.S.A.C）に保存されているが、未出版の資料である。（『Adolf Loos: Our Contemporary』（MAK, 2012）P28より。
<sup>[</sup>\*291931年にジオ・ボンティはフィネッティに対し、ドムスに「ロースに関する批評（'serious article' about Adolf Loos）」寄稿するよう要請する手紙を書いているが、フィネッティはこの要請を断っている。
<sup>[</sup>\*30イギリスの美術史家チャールズ・ホルム（Charles Holme, 1848-1923）によって1893年に創刊された美術雑誌。アーサー・ヌーヴォーやアーツ・アンド・クラフツ運動に大きな影響を与えた。また、フランス版やアメリカ版を同時発行するなど、国際的な雑誌として知られた。
<sup>[</sup>\*31『日本における西洋モダニズムの受容過程。過去における芸術を刷新し、機械工業の力によって新たな近代社会を形成することを目指した。
<sup>[</sup>\*32ジュゼッペ・デ・フィネッティ（Giuseppe de Finetti, 1892-1952）はイタリアの建築家、都市計画家。20世紀前半に結成された芸術集団であるノヴェチェト（Novocento）のメンバーであった。1912年前後の期間をベルリンやウィーンで過ごし、アドルフ・ロースとも親交があった。代表作に『日時計に家』（ミラノ、1925）など。
<sup>[</sup>\*33この手紙は現在バルマ大学内のプライベート・コレクション（'Pratica Loos', C.S.A.C）に保存されているが、未出版の資料である。（『Adolf Loos: Our Contemporary』（MAK, 2012）P28より。
<sup>[</sup>\*341931年にジオ・ボンティはフィネッティに対し、ドムスに「ロースに関する批評（'serious article' about Adolf Loos）」寄稿するよう要請する手紙を書いているが、フィネッティはこの要請を断っている。
<sup>[</sup>\*35イギリスの美術史家チャールズ・ホルム（Charles Holme, 1848-1923）によって1893年に創刊された美術雑誌。アーサー・ヌーヴォーやアーツ・アンド・クラフツ運動に大きな影響を与えた。また、フランス版やアメリカ版を同時発行するなど、国際的な雑誌として知られた。
<sup>[</sup>\*36『日本における西洋モダニズムの受容過程。過去における芸術を刷新し、機械工業の力によって新たな近代社会を形成することを目指した。
<sup>[</sup>\*37ジュゼッペ・デ・フィネッティ（Giuseppe de Finetti, 1892-1952）はイタリアの建築家、都市計画家。20世紀前半に結成された芸術集団であるノヴェチェト（Novocento）のメンバーであった。1912年前後の期間をベルリンやウィーンで過ごし、アドルフ・ロースとも親交があった。代表作に『日時計に家』（ミラノ、1925）など。
<sup>[</sup>\*38この手紙は現在バルマ大学内のプライベート・コレクション（'Pratica Loos', C.S.A.C）に保存されているが、未出版の資料である。（『Adolf Loos: Our Contemporary』（MAK, 2012）P28より。
<sup>[</sup>\*391931年にジオ・ボンティはフィネッティに対し、ドムスに「ロースに関する批評（'serious article' about Adolf Loos）」寄稿するよう要請する手紙を書いているが、フィネッティはこの要請を断っている。
<sup>[</sup>\*40イギリスの美術史家チャールズ・ホルム（Charles Holme, 1848-1923）によって1893年に創刊された美術雑誌。アーサー・ヌーヴォーやアーツ・アンド・クラフツ運動に大きな影響を与えた。また、フランス版やアメリカ版を同時発行するなど、国際的な雑誌として知られた。
<sup>[</sup>\*41『日本における西洋モダニズムの受容過程。過去における芸術を刷新し、機械工業の力によって新たな近代社会を形成することを目指した。
<sup>[</sup>\*42ジュゼッペ・デ・フィネッティ（Giuseppe de Finetti, 1892-1952）はイタリアの建築家、都市計画家。20世紀前半に結成された芸術集団であるノヴェチェト（Novocento）のメンバーであった。1912年前後の期間をベルリンやウィーンで過ごし、アドルフ・ロースとも親交があった。代表作に『日時計に家』（ミラノ、1925）など。
<sup>[</sup>\*43この手紙は現在バルマ大学内のプライベート・コレクション（'Pratica Loos', C.S.A.C）に保存されているが、未出版の資料である。（『Adolf Loos: Our Contemporary』（MAK, 2012）P28より。
<sup>[</sup>\*441931年にジオ・ボンティはフィネッティに対し、ドムスに「ロースに関する批評（'serious article' about Adolf Loos）」寄稿するよう要請する手紙を書いているが、フィネッティはこの要請を断っている。
<sup>[</sup>\*45イギリスの美術史家チャールズ・ホルム（Charles Holme, 1848-1923）によって1893年に創刊された美術雑誌。アーサー・ヌーヴォーやアーツ・アンド・クラフツ運動に大きな影響を与えた。また、フランス版やアメリカ版を同時発行するなど、国際的な雑誌として知られた。
<sup>[</sup>\*46『日本における西洋モダニズムの受容過程。過去における芸術を刷新し、機械工業の力によって新たな近代社会を形成することを目指した。
<sup>[</sup>\*47ジュゼッペ・デ・フィネッティ（Giuseppe de Finetti, 1892-1952）はイタリアの建築家、都市計画家。20世紀前半に結成された芸術集団であるノヴェチェト（Novocento）のメンバーであった。1912年前後の期間をベルリンやウィーンで過ごし、アドルフ・ロースとも親交があった。代表作に『日時計に家』（ミラノ、1925）など。
<sup>[</sup>\*48この手紙は現在バルマ大学内のプライベート・コレクション（'Pratica Loos', C.S.A.C）に保存されているが、未出版の資料である。（『Adolf Loos: Our Contemporary』（MAK, 2012）P28より。
<sup>[</sup>\*491931年にジオ・ボンティはフィネッティに対し、ドムスに「ロースに関する批評（'serious article' about Adolf Loos）」寄稿するよう要請する手紙を書いているが、フィネッティはこの要請を断っている。
<sup>[</sup>\*50イギリスの美術史家チャールズ・ホルム（Charles Holme, 1848-1923）によって1893年に創刊された美術雑誌。アーサー・ヌーヴォーやアーツ・アンド・クラフツ運動に大きな影響を与えた。また、フランス版やアメリカ版を同時発行するなど、国際的な雑誌として知られた。
<sup>[</sup>\*51『日本における西洋モダニズムの受容過程。過去における芸術を刷新し、機械工業の力によって新たな近代社会を形成することを目指した。
<sup>[</sup>\*52ジュゼッペ・デ・フィネッティ（Giuseppe de Finetti, 1892-1952）はイタリアの建築家、都市計画家。20世紀前半に結成された芸術集団であるノヴェチェト（Novocento）のメンバーであった。1912年前後の期間をベルリンやウィーンで過ごし、アドルフ・ロースとも親交があった。代表作に『日時計に家』（ミラノ、1925）など。
<sup>[</sup>\*53この手紙は現在バルマ大学内のプライベート・コレクション（'Pratica Loos', C.S.A.C）に保存されているが、未出版の資料である。（『Adolf Loos: Our Contemporary』（MAK, 2012）P28より。
<sup>[</sup>\*541931年にジオ・ボンティはフィネッティに対し、ドムスに「ロースに関する批評（'serious article' about Adolf Loos）」寄稿するよう要請する手紙を書いているが、フィネッティはこの要請を断っている。
<sup>[</sup>\*55イギリスの美術史家チャールズ・ホルム（Charles Holme, 1848-1923）によって1893年に創刊された美術雑誌。アーサー・ヌーヴォーやアーツ・アンド・クラフツ運動に大きな影響を与えた。また、フランス版やアメリカ版を同時発行するなど、国際的な雑誌として知られた。
<sup>[</sup>\*56『日本における西洋モダニズムの受容過程。過去における芸術を刷新し、機械工業の力によって新たな近代社会を形成することを目指した。
<sup>[</sup>\*57ジュゼッペ・デ・フィネッティ（Giuseppe de Finetti, 1892-1952）はイタリアの建築家、都市計画家。20世紀前半に結成された芸術集団であるノヴェチェト（Novocento）のメンバーであった。1912年前後の期間をベルリンやウィーンで過ごし、アドルフ・ロースとも親交があった。代表作に『日時計に家』（ミラノ、1925）など。
<sup>[</sup>\*58この手紙は現在バルマ大学内のプライベート・コレクション（'Pratica Loos', C.S.A.C）に保存されているが、未出版の資料である。（『Adolf Loos: Our Contemporary』（MAK, 2012）P28より。
<sup>[</sup>\*591931年にジオ・ボンティはフィネッティに対し、ドムスに「ロースに関する批評（'serious article' about Adolf Loos）」寄稿するよう要請する手紙を書いているが、フィネッティはこの要請を断っている。
<sup>[</sup>\*60イギリスの美術史家チャールズ・ホルム（Charles Holme, 1848-1923）によって1893年に創刊された美術雑誌。アーサー・ヌーヴォーやアーツ・アンド・クラフツ運動に大きな影響を与えた。また、フランス版やアメリカ版を同時発行するなど、国際的な雑誌として知られた。
<sup>[</sup>\*61『日本における西洋モダニズムの受容過程。過去における芸術を刷新し、機械工業の力によって新たな近代社会を形成することを目指した。
<sup>[</sup>\*62ジュゼッペ・デ・フィネッティ（Giuseppe de Finetti, 1892-1952）はイタリアの建築家、都市計画家。20世紀前半に結成された芸術集団であるノヴェチェト（Novocento）のメンバーであった。1912年前後の期間をベルリンやウィーンで過ごし、アドルフ・ロースとも親交があった。代表作に『日時計に家』（ミラノ、1925）など。
<sup>[</sup>\*63この手紙は現在バルマ大学内のプライベート・コレクション（'Pratica Loos', C.S.A.C）に保存されているが、未出版の資料である。（『Adolf Loos: Our Contemporary』（MAK, 2012）P28より。
<sup>[</sup>\*641931年にジオ・ボンティはフィネッティに対し、ドムスに「ロースに関する批評（'serious article' about Adolf Loos）」寄稿するよう要請する手紙を書いているが、フィネッティはこの要請を断っている。
<sup>[</sup>\*65イギリスの美術史家チャールズ・ホルム（Charles Holme, 1848-1923）によって1893年に創刊された美術雑誌。アーサー・ヌーヴォーやアーツ・アンド・クラフツ運動に大きな影響を与えた。また、フランス版やアメリカ版を同時発行するなど、国際的な雑誌として知られた。
<sup>[</sup>\*66『日本における西洋モダニズムの受容過程。過去における芸術を刷新し、機械工業の力によって新たな近代社会を形成することを目指した。
<sup>[</sup>\*67ジュゼッペ・デ・フィネッティ（Giuseppe de Finetti, 1892-1952）はイタリアの建築家、都市計画家。20世紀前半に結成された芸術集団であるノヴェチェト（Novocento）のメンバーであった。1912年前後の期間をベルリンやウィーンで過ごし、アドルフ・ロースとも親交があった。代表作に『日時計に家』（ミラノ、1925）など。
<sup>[</sup>\*68この手紙は現在バルマ大学内のプライベート・コレクション（'Pratica Loos', C.S.A.C）に保存されているが、未出版の資料である。（『Adolf Loos: Our Contemporary』（MAK, 2012）P28より。
<sup>[</sup>\*691931年にジオ・ボンティはフィネッティに対し、ドムスに「ロースに関する批評（'serious article' about Adolf Loos）」寄稿するよう要請する手紙を書いているが、フィネッティはこの要請を断っている。
<sup>[</sup>\*70イギリスの美術史家チャールズ・ホルム（Charles Holme, 1848-1923）によって1893年に創刊された美術雑誌。アーサー・ヌーヴォーやアーツ・アンド・クラフツ運動に大きな影響を与えた。また、フランス版やアメリカ版を同時発行するなど、国際的な雑誌として知られた。
<sup>[</sup>\*71『日本における西洋モダニズムの受容過程。過去における芸術を刷新し、機械工業の力によって新たな近代社会を形成することを目指した。
<sup>[</sup>\*72ジュゼッペ・デ・フィネッティ（Giuseppe de Finetti, 1892-1952）はイタリアの建築家、都市計画家。20世紀前半に結成された芸術集団であるノヴェチェト（Novocento）のメンバーであった。1912年前後の期間をベルリンやウィーンで過ごし、アドルフ・ロースとも親交があった。代表作に『日時計に家』（ミラノ、1925）など。
<sup>[</sup>\*73この手紙は現在バルマ大学内のプライベート・コレクション（'Pratica Loos', C.S.A.C）に保存されているが、未出版の資料である。（『Adolf Loos: Our Contemporary』（MAK, 2012）P28より。
<sup>[</sup>\*741931年にジオ・ボンティはフィネッティに対し、ドムスに「ロースに関する批評（'serious article' about Adolf Loos）」寄稿するよう要請する手紙を書いているが、フィネッティはこの要請を断っている。
<sup>[</sup>\*75イギリスの美術史家チャールズ・ホルム（Charles Holme, 1848-1923）によって1893年に創刊された美術雑誌。アーサー・ヌーヴォーやアーツ・アンド・クラフツ運動に大きな影響を与えた。また、フランス版やアメリカ版を同時発行するなど、国際的な雑誌として知られた。
<sup>[</sup>\*76『日本における西洋モダニズムの受容過程。過去における芸術を刷新し、機械工業の力によって新たな近代社会を形成することを目指した。
<sup>[</sup>\*77ジュゼッペ・デ・フィネッティ（Giuseppe de Finetti, 1892-1952）はイタリアの建築家、都市計画家。20世紀前半に結成された芸術集団であるノヴェチェト（Novocento）のメンバーであった。1912年前後の期間をベルリンやウィーンで過ごし、アドルフ・ロースとも親交があった。代表作に『日時計に家』（ミラノ、1925）など。
<sup>[</sup>\*78この手紙は現在バルマ大学内のプライベート・コレクション（'Pratica Loos', C.S.A.C）に保存されているが、未出版の資料である。（『Adolf Loos: Our Contemporary』（MAK, 2012）P28より。
<sup>[</sup>\*791931年にジオ・ボンティはフィネッティに対し、ドムスに「ロースに関する批評（'serious article' about Adolf Loos）」寄稿するよう要請する手紙を書いているが、フィネッティはこの要請を断っている。
<sup>[</sup>\*80イギリスの美術史家チャールズ・ホルム（Charles Holme, 1848-1923）によって1893年に創刊された美術雑誌。アーサー・ヌーヴォーやアーツ・アンド・クラフツ運動に大きな影響を与えた。また、フランス版やアメリカ版を同時発行するなど、国際的な雑誌として知られた。
<sup>[</sup>\*81『日本における西洋モダニズムの受容過程。過去における芸術を刷新し、機械工業の力によって新たな近代社会を形成することを目指した。
<sup>[</sup>\*82ジュゼッペ・デ・フィネッティ（Giuseppe de Finetti, 1892-1952）はイタリアの建築家、都市計画家。20世紀前半に結成された芸術集団であるノヴェチェト（Novocento）のメンバーであった。1912年前後の期間をベルリンやウィーンで過ごし、アドルフ・ロースとも親交があった。代表作に『日時計に家』（ミラノ、1925）など。
<sup>[</sup>\*83この手紙は現在バルマ大学内のプライベート・コレクション（'Pratica Loos', C.S.A.C）に保存されているが、未出版の資料である。（『Adolf Loos: Our Contemporary』（MAK, 2012）P28より。
<sup>[</sup>\*841931年にジオ・ボンティはフィネッティに対し、ドムスに「ロースに関する批評（'serious article' about Adolf Loos）」寄稿するよう要請する手紙を書いているが、フィネッティはこの要請を断っている。
<sup>[</sup>\*85イギリスの美術史家チャールズ・ホルム（Charles Holme, 1848-1923）によって1893年に創刊された美術雑誌。アーサー・ヌーヴォーやアーツ・アンド・クラフツ運動に大きな影響を与えた。また、フランス版やアメリカ版を同時発行するなど、国際的な雑誌として知られた。
<sup>[</sup>\*86『日本における西洋モダニズムの受容過程。過去における芸術を刷新し、機械工業の力によって新たな近代社会を形成することを目指した。
<sup>[</sup>\*87ジュゼッペ・デ・フィネッティ（Giuseppe de Finetti, 1892-1952）はイタリアの建築家、都市計画家。20世紀前半に結成された芸術集団であるノヴェチェト（Novocento）のメンバーであった。1912年前後の期間をベルリンやウィーンで過ごし、アドルフ・ロースとも親交があった。代表作に『日時計に家』（ミラノ、1925）など。
<sup>[</sup>\*88この手紙は現在バルマ大学内のプライベート・コレクション（'Pratica Loos', C.S.A.C）に保存されているが、未出版の資料である。（『Adolf Loos: Our Contemporary』（MAK, 2012）P28より。
<sup>[</sup>\*891931年にジオ・ボンティはフィネッティに対し、ドムスに「ロースに関する批評（'serious article' about Adolf Loos）」寄稿するよう要請する手紙を書いているが、フィネッティはこの要請を断っている。
<sup>[</sup>\*90